学生生活の満足感とアイデンティティ形成の間をつなぐもの

―充実感からのアプローチ―

仲　野　好　重　　壺　井　康　仁*

要　旨

本研究の目的は、学生生活に対する満足感や充実感が自我同一性の形成・確立とどのような関係にあるのかを明らかにすることである。2007年７月に、関西地方の都市部にある4年制私立大学の学生377名（男子178名、女子199名）を対象に質問紙調査を実施した。質問紙に用いた尺度は、多次元自我同一性尺度、アイデンティティ確立尺度、充実感尺度の３種である。これらの尺度における各因子の相関を調べた後、学生生活満足感・充実感をそれぞれ独立変数に、自我同一性の形成・確立を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、自我同一性の形成・確立に強く影響を与える要因は充実感であることが明らかになった。一方、満足感、なかでも学業と友人関係に対する満足感は、自我同一性の形成・確立と相関はあるものの、むしろ充実感を規定する要因となっていることが分かった。以上のことより、学業と友人関係への満足感を中心として形成された充実感は、自我同一性の形成と確立に大きな影響を与えることが示唆された。

キーワード：大学生、学生生活、満足感、充実感、自我同一性

Ⅰ．序論

１．はじめに

青年期の課題である自我同一性の形成・確立が学生生活の満足感や充実感に対して非常に重要な意味を持っていると考えられる。筆者の壺井は５年前の学生時代に、加藤（1983）の作成した自我同一性測定尺度を試みたことがあった。その時点の自我同一性地位は、D－M中間（同一性拡散とモラトリアムの間）であったが、現在、もう一度同

＊）株式会社ニューオータニ

じ尺度を試みたところ、同一性達成という地位になっていた。青年期にある大学生は、自我同一性の模索をしつつ、変化を遂げていると考えられる。Erikson（1980）によると、青年期は自我同一性形成を目指して様々な経験が可能な時期であり、そのことを社会から認められた期間としてモラトリアム（猶予）という名称で説明している。青年期の発達課題である自我同一性が徐々に明確化していく中で、学生たちが学生生活に対して充実感を持てるようになると仮定するならば、部活動やアルバイトなどの活動の中から失敗や成功、仲間との協力、自己の振り返りなどを経験することで自我同一性に変化が生じ、満足感や充実感を持つようになると考えられる。また、日々の生活に充実感を持つことが自我同一性の形成・確立につながるとするならば、学生生活に満足感や充実感を持つことによって、青年期の発達課題である自我同一性が明確化していくと考えられる。

これらのことから、学生生活に対する満足感や充実感を規定する自我同一性の統合、あるいは自我同一性の統合を規定する学生生活に対する満足感や充実感、という未だ明確化されていない二方向の関係性が浮き出てくる。どのような活動（部活・サークル活動への参加やアルバイトの有無など）が学生生活の満足感に影響を与えるかという研究は数多く行われてきた（植村，2001、篠崎，2006、新井，2003）。また、学生生活への満足感に影響を与える要因の研究も行われてきた（福田ら，2005、牧野ら，2002）。このように、学生生活に対する満足感や充実感を規定する活動・要因に関する研究は比較的多いのだが、学生生活に対する満足感や充実感と自我同一性との関連についての研究はあまり多くは見出されていない。これに関する研究として、大学生の意欲低下傾向と自我同一性の発達に関する研究（白石ら，2005）や、充実感と自我同一性の統合に関する研究（西平，1979、大野，1984，2004）が挙げられる。また、大学生の自我同一性の感覚が、個人が重要とする外的な活動に対して付与された肯定的な認知的評価（自己形成、充実感、自己受容）との関連により、形成・確立されることが可能性として示されている（山田，2004）。

そこで本研究では、大学生の学生生活に対する満足感や充実感が自我同一性の形成・確立とどのような関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。

２．背景および先行研究

⑴　大学生の学生生活満足感に関する研究

大学生の学生生活満足感には、対人関係の充実、教員への肯定的態度、一般教養・専門知識習得感、大学・学部への同一性、居場所感などが影響を与えており、その中でも、学習、大学・学部への同一性、居場所感、対人関係は互いに関連していることを示した研究が興味深い（植村ら，2001）。その研究の中で、学生生活満足感を得る上で、特に友人関係が非常に重要であるということも明らかにされている。

クラブ・サークル活動が、学生生活満足感に影響を与えていることを示す研究も多い。新井（2003）らは、大学生の多くが、授業やカリキュラムに不満は持っているが、サークル活動などによって得られる人間関係によって日常生活における心理的安定を感じ、学生生活の満足感も得ていることを明らかにした。この研究では、サークル活動所属者と非所属者では、明らかに学生生活満足感に差があることも示し、学生は趣味やスポーツに関連したサークル活動だけでなく、人間関係をもとめてサークルに参加しているだろうと示唆している。これは、篠崎（2006）らの研究でも示されており、アルバイト、サークルなどを通しての広い範囲での出会いは学生生活満足感に影響を与えるとされている。國眼（2005）らは、サークル活動の場は、学生にとって大切な「居場所」であり、共通の目標を目指して一緒に成長できる仲間がいる場であるから、その居場所感を支えに自分の価値に気づき、大学生活の充実感を大きく左右するのではないかと考察している。

⑵　青年期の充実感に関する研究

西平（1979）は、充実感がその青年の健全な自我同一性の実感であるという考え方を発展させ、充実感・生きがい感はその青年の信頼、自立、連帯によって説明され、しらけ気分は、不信、甘え、孤立によって説明されるという青年の心情モデルを提出した。

前項の西平の研究を基に、大野（1984）は、青年の充実感を構成する因子を見出す研究をした。その結果、「充実感気分―退屈・空虚感（以下、充実感と呼ぶ）」、「自立・自信―甘え自信のなさ（以下、自立・自信と呼ぶ）」、「連帯―孤立（以下、連帯と呼ぶ）」、「信頼・時間的展望―不信・時間的展望の拡散（以下、信頼と呼ぶ）」という４つの因子が抽出され、自立・自信、連帯、信頼の３因子が充実感気分に影響を与えていることが明らかになってきた。この結果と西平（1979）の心情モデルから、大野（1984）は内容の拡大された心情モデルを作成した。このモデルは、充実感気分を構成する因子を自立・自信、連帯、信頼・時間的展望とし、退屈空虚感を構成する因子を甘え・自信のなさ、孤立、不信・時間的展望の拡散とするもので、充実感気分が自我同一性統合の方向と対応し、退屈空虚感が自我同一性の拡散の方向と対応しているというものである。この結果に対し、“拡散してしまった自我同一性の様相が毎日の生活の虚ろさとして反映され、逆に自我同一性が統合の方向に向かい、主体的に毎日の生活にかかわっている健康さがはりのある生活気分として反映されるのではないか”と考察している（大野，1984，p19）。さらに、上述の内容の拡大された心情モデルが現代の青年にも当てはまることを明らかにした上で、充実感の構造に関するMIMICモデルの妥当性が示されている（大野ら，2004）。このモデルは、自立・自信、連帯、信頼が包括的アイデンティティに影響し、それが充実感気分や満足感に影響するというものである。この研究結果から、

包括的アイデンティティとは青年期に限定したアイデンティティ形成の問題ではなく、生涯発達的な人格形成のプロセスにおける自己肯定的な感覚、実感の反映であると述べられている。また、自我同一性の統合度の高さが充実感に影響を与えると同時に、自我同一性形成に影響を与える要因として、日常生活の充実感が挙げられている（森ら，2001）。これより、自我同一性の統合と充実感は相互に影響しあっていることが理解される。

青年期の充実感を規定する要因の研究も行われている（高井，2006）。それによると、意欲的な生き方態度と自尊感情を根底に、男子は精神的安定とゆとり感、女子は上昇志向、頑張り、競争心によって充実感を抱くことが示されている。

青年期における友人への感情と充実感の関連についての研究も行われている（榎本，1999）。それによると、男子は友人に対して信頼感、安心感を持つことが充実感に関連しており、女子は友人からの自立が関連していることがわかっている。また、青年期において、友人への否定感や不安定感が、生活を否定的に捉えることに繋がることも明らかになっている。

谷田（2006）は、大学生の学生生活における充実感に関する研究を行っている。この中で学生生活の充実は、学生の大学における公的生活と私的生活の総合的な評価であるとし、サークルなどの団体参加者の方が充実感が高いということを示している。特に、団体に参加することで密な人間関係を持てているかどうかが充実感に影響を与えており、また、女性のほうが男性よりも充実度評定が高いことも明らかにしている。

これまでの研究から、充実感が自我同一性と関連があるものであること（西平，1979、大野，1984，2004）や友人関係などの人間関係が充実感に影響していることが明らかにされている（榎本，1999、谷田，2006）。

⑶　アイデンティティ

自我同一性は、“その主観的側面からみると、自我の様々な統合方法に対して自己斉一性と連続性が存在するという事実と、これらの統合方法が、他者に対して自己が持つ意味の斉一性と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚”と定義されている（Erikson, 1950，p10）。つまり、自我同一性の感覚に大切なことは、「自分は何者でもない過去から未来まで一貫した自分である」という自己認識と、そういった自己が他者によっても認められているという実感の二つを感覚として得ることだということである。この自我同一性の感覚が確かに自分の中に出来上がっているとき、これを自我同一性の形成と呼ぶ。青年期においては、“自分が自分であると感じる自分に比べて、他人の目に自分がどう映るかなど、それ以前の時期に育成された役割や技術を、その時代の理想的な標準型にどう結びつけるかといった問題”に直面するとされている。この「自分で自分がわからない」という葛藤が、自我同一性拡散の危機と呼ばれるものであり、この

青年期の葛藤状態を逸脱行為とは見ず、自分と社会との違いを排除しようとする不寛容は“同一性拡散の危機に対する必然的防衛”と考えられていた（Erikson, 1950，p111－115）。また、青年期における自我同一性の感覚は、「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の４つの次元から捉えられることが明らかになっている（谷，2001）。

Erikson の自我同一性の定義は大きく二つに分けられると指摘する研究がある（西平，1973）。それによると、ひとつは「青年期というひとつの発達段階における達成すべき課題」としての自我同一性であり、他方は「社会的役割と内的成熟、調和的統合を通して、より包括的な新しい自我同一性が求め続けられる不断の運動」としての自我同一性であるとされている。また、これらは密接に関係しており、切り離すことは難しいともいわれている。

⑷　大学生と自我同一性

Erikson の発達理論の中で、青年期の発達課題は「同一性対同一性拡散」とされている。青年期においてこの同一性の統合がうまくいかなかった場合、同一性拡散と呼ばれる状態になる。これは、自分が何であるのかわからなくなってしまうなどの状況であり、その程度によっては日常生活に支障をきたすような症状となって表れる。この同一性拡散ではないものの、いまだ同一性が形成されていない段階をモラトリアムという。青年期は自我同一性形成のために様々な経験をすることができる時期であり、そのことを社会から認められた期間としてモラトリアム（猶予）と称しているのである。青年期は、“すべての同一性の各構成要素が集合して最終的なまとまりを獲得する”時期と位置づけられている（Erikson, 1980，p153）。

金子（1995）は、青年期における他者との関係と自我同一性についての研究を行っている。この研究では、「左右されやすさ（同調性）」や「距離を置くこと（隔絶性）」が強い青年ほど同一性拡散の感覚が強く、「他の人との違いの意識」が強い青年ほど自分への確信、つまり自我同一性の感覚が強いという結果が示されている。また、青年期における友人関係と自我同一性の関連について調べたものに、古野（2003）らのものがある。これによると、自我同一性を確立している人は、自己の安定を基に安定した友人関係を持つことができ、友人との関わりを通じて、さらに自己を見つめ直し探求する姿勢を持っていることがわかった。また、同じ研究では青年期における自我同一性の確立は、精神的健康の側面にも影響していることが明らかにされている。

大学生の自我同一性の感覚が、個人が重要とする外的な活動に対して付与された肯定的な認知的評価（自己形成、充実感、自己受容）との関連により、形成・獲得されることが可能性として示されている研究もある（山田，2004）。またこれと同時に、自我同

一性の感覚のために、大学生のどういった活動が重要かという視点から、個人がどのようにそれらを意味づけているかという視点に重点を置く大切さも見出されている。つまり、大学生活における活動は、学生一人一人によって重要度が異なり、学生が重点を置く活動が自我同一性に関与していると考えられる。

これらの研究から、青年期を生きる学生にとって、自我同一性の形成・確立という発達課題は重要な意味を持つと考えられる。

３．本研究における概念の操作的定義

本研究では、「学生生活満足感」と「自我同一性」をそれぞれ操作的に定義付ける。その理由は、どちらの用語も広義の意味を含んでおり、研究を進める上では、意味を限定する必要があると考えるからである。

⑴　学生生活満足感の操作的定義

青年期の充実感は“青年が健康な同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情”と定義されている（大野，1984，p12）。本研究では学生生活満足感を「学業、部活・サークル活動、アルバイト、友人関係といった学生生活に関連した要因に対する満足感と、自我同一性を形成・確立していく過程で感じられる満たされた感覚」と定義する。

⑵　自我同一性の操作的定義

本研究では、自我同一性の概念を Erikson の発達理論の第５段階（青年期）における「同一性の感覚」の形成と、自我同一性の確立感に限定する。なぜなら、自我同一性は Erikson の漸成発達理論のすべての段階に関与している概念であり、各段階によってその意味合いに多少の差異がある。そのため、本研究は青年期に当たる大学生を対象とした調査でることから、「同一性の感覚」とその確立感に限定して考えていくこととする。具体的には、青年期の同一性の感覚に関係する「自己斉一性・連続性」、「対他的同一性」、「対自的同一性」、「心理社会的同一性」などの側面の形成と、自我同一性を確立したという感覚を指すことにする。また、「自我同一性」と「アイデンティティ」を同義の言葉として用いる。

４．仮説

本研究の目的は、大学生の学生生活満足感と自我同一性の形成・確立の関係を明らかにすることである。その為には、学生生活における満足感や充実感が、大学生の自我同一性の形成と確立の双方に影響を与えているということを証明する必要があると考えら

れる。学生生活満足感を学業満足感、友人関係満足感、アルバイト満足感、サークル満足感、充実感の側面とし、仮説１を「大学生活に対する満足感や充実感が自我同一性を形成の形成を促進しているだろう」、仮説２を「大学生活に対する満足感や充実感が自我同一性の確立を促進しているだろう」とし、調査・分析を進めていくこととする。

Ⅱ．方法

１．調査対象者

兵庫県にある４年制の私立大学の大学生379名を対象に質問紙調査を行い、そのうち377名のデータを分析対象とした（有効回答率99.47%）。377名の内訳は、性別で見ると、男178名、女199名であり、学年ごとでは、１年生194名、２年生51名、３年生69名、４年生63名であった。

２．調査方法

授業時に質問紙を配布し、配布した質問紙に回答してもらいその場で回収した。回収率は100%であった。

３．調査内容

以下の３つの質問紙を組み合わせて質問紙とした。なお、各質問紙の質問項目は各尺度内においてランダマイズを行った。

４．尺度の種類

⑴　多次元自我同一性尺度（谷，1997；1998；2001）

⑵　アイデンティティ尺度（下山，1992）

⑶　充実感尺度（大野，1984）

５．調査期間

2007年７月上旬から下旬。

Ⅲ．結果

１．各満足感

⑴　学業に対する満足感の違いによる学生の人数とその割合

学業に対する満足感の違いによる学生の割合をまとめた（図１）。

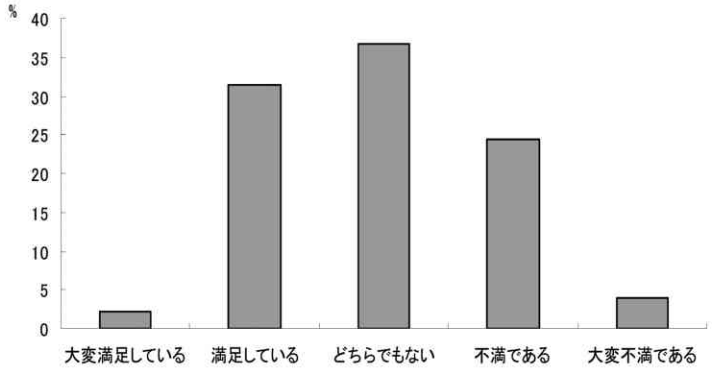

図１　学業満足感ごとの学生の割合

学生全体の人数が374名だったのに対し、大変満足している８名（2.1%）、満足している119名（31.4%）、どちらでもない139名（36.7%）、不満である93名（24.5%）、大変不満である15名（4.0%）であった。大変満足している学生と大変不満である学生は共に少なかった。学生は必ずしもすべての講義に満足しているわけではなく、満足しているものもあれば、不満なものもあると考えられ、その結果どちらでもない学生が最も多かったのではないだろうか。

⑵　部活・サークル活動の有無による学生の人数とその割合

部活・サークル活動（以下、サークルと呼ぶ）の有無による学生の割合をまとめた（図２）。

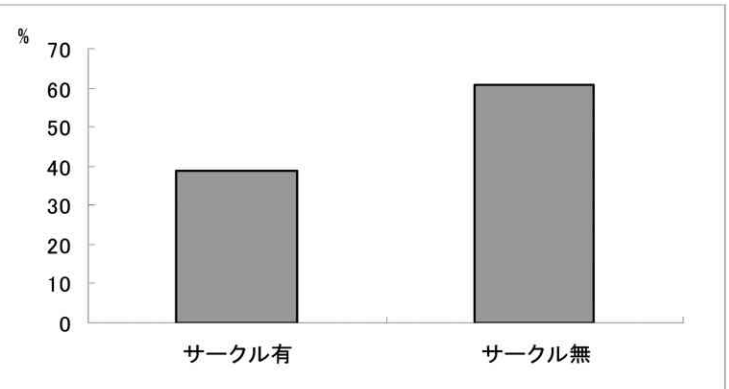

図２　サークルの有無による学生の割合

学生全体の人数が378名であったのに対し、サークルに参加している学生は147名

(38.8%)、参加していない学生は231名（60.9%）であった。サークル参加学生は全体の３割程度であり、学生があまり積極的にサークルに参加していないことがわかった。

(3)　サークルへの満足感の違いによる学生の人数とその割合

サークルへの満足感の違いによる学生の割合をまとめた（図３）。

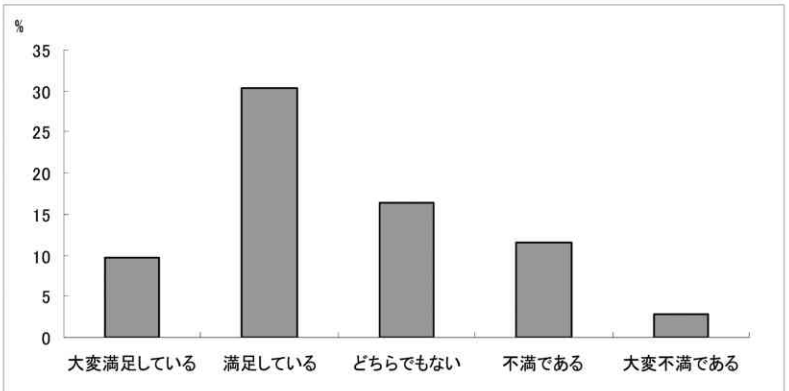

図３　サークル満足感ごとの学生の割合

対象学生全体が146名だったのに対し、大変満足している23名（6.1%)、満足している71名（18.7%)、どちらでもない36名（9.5%)、不満である11名（2.9%)、大変不満である５名（1.3%）であった。これより、サークルに参加している学生の多くは、その活動に対して満足感を感じているということがわかる。

(4)　アルバイトの有無による学生の人数とその割合

アルバイトの有無による学生の割合をまとめた（図４）。

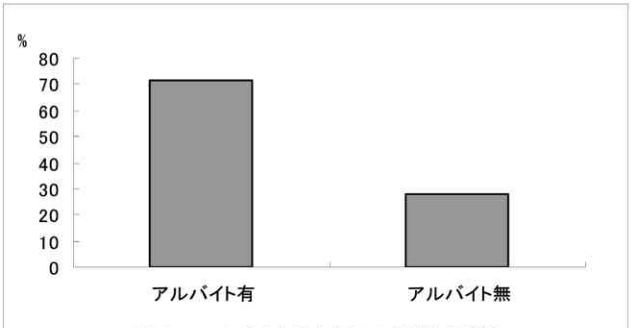

図４　アルバイトの有無による学生の割合

学生全体が378名だったのに対し、アルバイトをしている学生272名（71.8%)、していない学生は106名（28.0%）であった。このことから、多くの学生がアルバイトをしてい

ることがわかった。大学生は自分の自由に使える時間が多くあり、その時間の有効利用や自由に使えるお金の確保を目的としてアルバイトに従事すると考えられる。そのため、多くの学生がアルバイトに携わっているのではないだろうか。

⑸　アルバイトへの満足感の違いによる学生の人数とその割合

アルバイトへの満足感の違いによる学生の割合をまとめた（図５）。

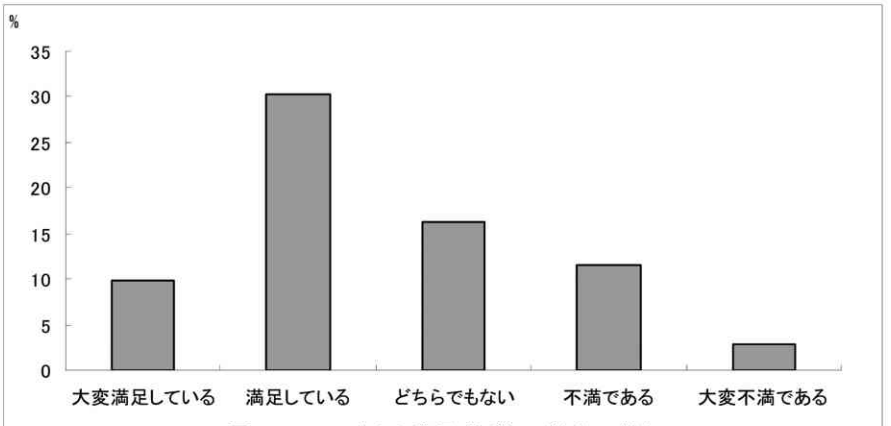

図５　アルバイト満足感ごとの学生の割合

対象学生全体が269名だったのに対し、大変満足している37名（9.8%）、満足している115名（30.3%）、どちらでもない62名（16.4%）、不満である44名（11.6%）、大変不満である11名（2.93%）であった。これより、現在のアルバイトにある程度の満足感を持っていないと、同じアルバイトを続けることは困難であると考えられるため、現状に満足感を得られている学生がより多いのだろう。

⑹　友人関係に対する満足感の違いによる学生の人数とその割合

友人関係に対する満足感の違いによる学生の割合をまとめた（図６）。

学生全体が367名だったのに対し、大変満足している139名（36.7%）、満足している167名（44.1%）、どちらでもない44名（11.6%）、不満である13名（3.4%）、大変不満である４名（1.1%）であった。大半の学生が友人関係に対し満足感を感じているということがわかった。友人関係の充実は、学生生活にとって非常に大切なものになるだろうと考えられる。

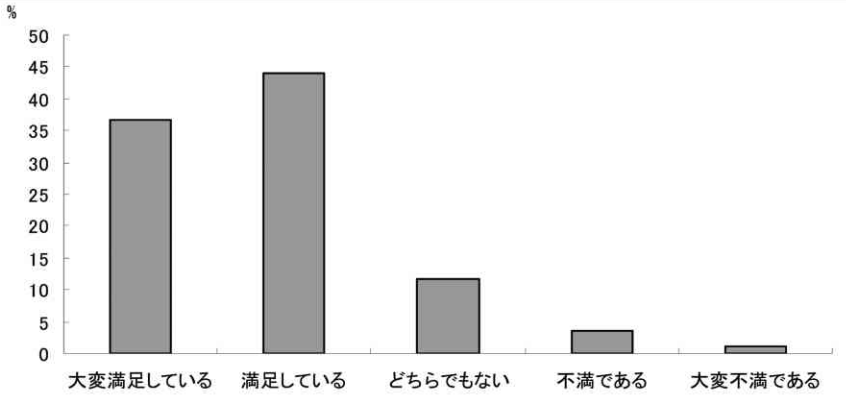

図６　友人関係満足感ごとの学生の割合

２．各尺度の信頼性分析

はじめに、質問紙に使用した多次元自我同一性尺度、アイデンティティ尺度、充実感尺度の信頼性を確かめるため、クロンバックのα係数を用いて信頼性分析をした。その結果、多次元自我同一性尺度α=.88、アイデンティティ尺度α=.85、充実感尺度α=.87となった。いずれの尺度からも非常に高い信頼性を確認できたことから、これらの３尺度を使って分析を進めていくこととした。

３．満足感と充実感の関連

学業やアルバイト、サークル、友人関係に対する満足感と充実感の相関を調べた（表１）。

表１　満足感と充実感の相関

	学業満足感	アルバイト満足感	サークル満足感	友人関係満足感	充実感
学業満足感	1.00				
アルバイト満足感	0.12	1.00			
サークル満足感	.24**	0.12	1.00		
友人関係満足感	.14**	.15**	.40**	1.00	
充実感	.29**	.20**	.25**	.29**	1.00

** 1%水準で有意

その結果、各満足感と充実感の間に相関があることがわかった。しかし、学業満足感とサークル満足感がアルバイト満足感と相関がないことから、大学生にとって学内の活動と学外の活動の持つ意味は違うものであることがわかった。また、友人関係満足感はサークル満足感と強く関連があり、サークルという友人関係が濃い環境での満足感が友人関係満足感に繋がると考えられる。

これらのことから、学業や友人関係などに対する満足感や充実感は互いに結びついておいり、それらを得るためには、学生がどういった学生であるかということよりも、どういった学生生活の送り方をしているかに起因するということがわかった。

４．学生生活における満足感・充実感と多次元自我同一性の関連

⑴　学業満足感と多次元自我同一性の関連

学業に対する満足感は、「大変満足している」・「満足している」を選んだ学生を満足群（123名）、「どちらでもない」を選んだ学生を中間群（137名）、「不満である」・「大変不満である」を選んだ学生を不満群（107名）に分けた。多次元自我同一性の平均点を３群で比べると、満足群4.31、中間群3.86、不満群3.79であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、３群の間に有意な差があることがわかった（$F(2,364)=14.63$，$MSE=9.58$，$p<.01$）。続いて、どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表２）。

表２　学業満足感による多次元自我同一性の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	107	3.79	0.84	
中間群	137	3.86	0.69	満足群＞中間群・不満群**
満足群	123	4.31	0.84	

** 1%水準で有意

満足群と不満群、満足群と中間群においてそれぞれ１％水準で有意な差が見られた。中間群と不満群には差は見られなかった。これは、学業満足感の高い学生のほうが多次元の自我同一性を形成できていることを表している。

⑵　アルバイト満足感と多次元自我同一性の関連

アルバイトに対する満足感についても上記と同様に、学生を満足群（149名）、中間群（61名）、不満群（54名）に分けた。多次元自我同一性の平均点を３群で比べると、満足群4.11、中間群3.93、不満群3.68であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、３群の間に有意な差があることがわかった（$F(2,261)=5.66$，$MSE=2.92$，$p<.01$）。どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表３）。

表３　アルバイト満足感による多次元自我同一性の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	54	3.68	0.79	
中間群	61	3.93	0.71	満足群＞不満群**
満足群	149	4.11	0.84	

** 1%水準で有意

満足群と不満群に１％水準で有意な差が見られた。満足群と中間群、中間群と不満群には差は見られなかった。これより、アルバイト満足感の高い学生のほうが多次元の自我同一性を形成できていることがわかる。

(3) サークル満足感と多次元自我同一性の関連

サークルに対する満足感においても同様に、学生を満足群（93名）、中間群（35名）、不満群（16名）に分けた。多次元自我同一性の平均点を３群で比べると、満足群4.10、中間群3.79、不満群3.74であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、これらの３群の間には有意な差がないことがわかった（F(2,141)=2.27，MSE=1.74，p>.05)。サークル活動の満足感ごとの人数と平均点をまとめたものが表４である。

表４　サークル満足感による多次元自我同一性の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	16	3.74	0.97	
中間群	35	3.79	0.81	
満足群	93	4.10	0.88	

つまり、サークル活動に対する満足感は多次元の自我同一性の形成とは関連がなかったことがわかる。

(4) 友人関係満足感と多次元自我同一性の関連

友人関係に対する満足感においても同様に、学生を満足群（303名）、中間群（41名）、不満群（17名）と分けた。多次元自我同一性の平均点を３群で比べると、満足群4.05、中間群3.63、不満群3.81であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、３群の間に有意な差があることがわかった（F(2,358)=5.26，MSE=3.57，p<.01)。どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表５）。

表５　友人関係満足感による多次元自我同一性の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	17	3.81	1.21	
中間群	41	3.63	0.67	満足群＞中間群**
満足群	303	4.05	0.82	

** 1%水準で有意

満足群と中間群に１%水準で有意な差が見られた。満足群と不満群、中間群と不満群には差は見られなかった。このことから、友人関係に対して明確に満足、不満足という決定ができない学生は自我同一性の形成が不十分であるといえるだろう。

(5) 充実感と多次元自我同一性の関連

充実感の高低により、多次元自我同一性に差が出るかを調べた。充実感の中央値以上を高群（161名）、中央値未満を低群（204名）として、t検定により多次元自我同一性の平均値の比較をした結果、高群は、M=4.51，SD=.73、低群はM=3.58，SD=.68であり、有意差が認められた（t(363)=12.57，p<.01)。これらをまとめたものが表６である。

表６　充実感の高群低群による多次元自我同一性の比較

		N	平均値	標準偏差	t検定
充実感	低群	204	3.58	0.68	t(363)=-12.57**
	高群	161	4.51	0.73	

** 1%水準で有意

その結果、充実感の高低により多次元自我同一性に有意な差があることがわかった。充実感が高い学生のほうが低い学生よりも多次元自我同一性が高いということから、自我同一性の形成には充実感を持つことが大切であると考えられる。

５．学生生活における満足感・充実感とアイデンティティ確立の関連

学生の学業満足感、アルバイト満足感、サークル満足感、友人関係満足感、充実感により、アイデンティティ確立の平均点を比較した。その結果、学業とアルバイトに対する満足感と充実感において、有意な差があることがわかった。

⑴　学業満足感とアイデンティティ確立の関連

学業に対する満足感は、「大変満足している」・「満足している」を選んだ学生を満足群（124名）、「どちらでもない」を選んだ学生を中間群（137名）、「不満である」・「大変不満である」を選んだ学生を不満群（107名）と分けた。アイデンティティ確立の平均点を３群で比べると、満足群2.90、中間群2.47、不満群2.54であり、それらを一元配置分散分析を用いて比較をした。その結果、３群の間に有意な差があることがわかった（$F(2,365)=27.47$，$MSE=6.72$，$p<.01$）。どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表７）。

表７　学業満足感によるアイデンティティ確立の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	107	2.54	0.50	
中間群	137	2.47	0.47	満足群＞不満群・中間群**
満足群	124	2.90	0.52	

** 1%水準で有意

満足群と不満群、満足群と中間群に１％水準で有意な差が見られた。不満群と中間群には差は見られなかった。これより、学業への満足感が高い学生は自我同一性の獲得がより促進されているということがわかる。

⑵　アルバイト満足感とアイデンティティ確立の関連

アルバイトに対する満足感も同様に、学生を満足群（147名）、中間群（61名）、不満群（55名）に分けた。アイデンティティ確立の平均点を各群で比べると、満足群2.70、中間群2.64、不満群2.49であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、

これらの群に有意な差があることがわかった（F(2,260)=3.48，MSE=.89，p<.05)。よって、どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表８）。

表８　アルバイト満足感によるアイデンティティ確立の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	55	2.49	0.07	
中間群	61	2.64	0.06	満足群＞不満群*
満足群	147	2.70*	0.04	

* 5%水準で有意

満足群と不満群に５％水準で有意差があることがわかった。満足群と中間群、中間群と不満群には有意な差は見られなかった。これは、アルバイトに満足感を持っている学生のほうがより自我同一性を獲得できていることを表している。

(3)　サークル満足感とアイデンティティ確立の関連

サークル活動に対する満足感も同様に、学生を満足群（94名)、中間群（36名)、不満群（16名）に分けた。アイデンティティ確立の平均点を各群で比べると、満足群2.71、中間群2.67、不満群2.49であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、満足群、どちらでもない群、不満群の間に有意な差は見られなかった（F(2,143)=1.07，MSE=.31，p>.05)。サークル満足感の各群の人数と平均点をまとめたものが表９である。

表９　サークル満足感によるアイデンティティ確立の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	16	2.49	0.50	
中間群	36	2.67	0.47	
満足群	94	2.71	0.52	

これは、サークル活動への満足感は自我同一性の獲得にあまり影響がなかったことを表している。

(4)　友人関係満足感とアイデンティティ確立の関連

友人関係に対する満足感も同様に、学生を満足群（300名)、中間群（44名)、不満群（17名）に分けた。アイデンティティ確立の平均点を各群により比べると、満足群2.65、中間群2.51、不満群2.74であり、それらを一元配置分散分析により比較した。その結果、いずれの群間にも有意な差は見られなかった（F(2,358)=1.65，MSE=.46，p>.05)。各群の人数と平均点をまとめたものが表10である。

表10　友人関係満足感によるアイデンティティ確立の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	17	2.74	0.75	
中間群	44	2.51	0.44	
満足群	300	2.65	0.53	

これは、友人関係への満足感の高低は自我同一性の獲得にあまり影響を与えなかったことを表している。

⑸　充実感とアイデンティティ確立の関連

充実感の高低により、アイデンティティ確立に差が出るかを調べた。中央値以上を高群（163名）、中央値未満を低群（205名）として、アイデンティティ確立の平均点をｔ検定により比較した。その結果、高群は、M=2.96，SD=.45、低群は、M=2.38，SD=.43となり、有意な差が見られた（t(366)=12.83，p<.01）。これらの結果をまとめたものが表11である。

表11　充実感の高群低群によるアイデンティティ確立の比較

		N	平均値	標準偏差	t検定
充実感	低群	205	2.38	0.43	t(366)=-12.83**
	高群	163	2.96	0.45	

** 1%水準で有意

表11より、充実感の高群低群により、アイデンティティ確立に有意な差があることがわかる。つまり、充実感をより強く感じている学生のほうが、自我同一性を獲得できているということである。これより、自我同一性の獲得には充実感が重要であることがわかった。

６．満足感・充実感と自我同一性の相関

学業満足感、アルバイト満足感、サークル満足感、友人関係満足感、充実感、多次元自我同一性、アイデンティティ確立の間の相関を調べた（表12）。

表12　満足感・充実感と自我同一性の相関

	多次元自我同一性	アイデンティティ確立
学業満足感	.26**	.27**
アルバイト満足感	.20**	.14**
サークル満足感	.21**	0.15
友人関係満足感	.22**	0.10
充実感	.72**	.73**

** 1%水準で有意

これより、多次元自我同一性に対してすべての満足感・充実感が相関があることがわかった。一方、アイデンティティ確立にはサークル満足感と友人関係満足感は相関が見

られなかった。そして、充実感は多次元自我同一性とアイデンティティ確立に対し、非常に高い相関があることがわかった。

7．学生生活における満足感と充実感が多次元自我同一性に与える影響

一元配置分散分析とｔ検定の結果、学業やアルバイト、友人関係に対する満足感と充実感が高い学生は、多次元自我同一性が有意に高くなるということがわかった。これらの満足感と充実感によって多次元自我同一性への影響力に差があるか調べた。その際、アルバイトとサークルに対する満足感は、すべての学生がそれらの活動に参加しているわけではないため、まずそれらを除外して分析を行った。その結果、満足感・充実感により多次元自我同一性への影響力に差があることがわかった（F(3,351)=137.63，p<.01)。それらの影響力の違いを調べるため、重回帰分析を行った（表13)。

表13　学業・友人関係満足感と充実感が多次元自我同一性に与える影響

	標準偏回帰係数β	単相関
充実感	.71**	.72**
学業満足感	0.05	.26**
友人関係満足感	0.00	.21**

** 1%水準で有意

N=353, F(3,351)=137.63,p<.01, R=.72, R2乗=.52, 調整済みR2乗=.52

その結果、充実感のみが多次元自我同一性に有意に影響を与えていることがわかった。充実感は非常に強く影響を与えていた（標準偏回帰係数β=.71，p<.01）が、学業満足感と友人関係満足感は多次元自我同一性に影響を与えていないといえるだろう。

次に、アルバイトとサークルに対する満足感と充実感において、多次元自我同一性に対する影響力に違いがあるかを調べた。その結果、２つ満足感と充実感の多次元自我同一性への影響力に差があることがわかった（F(5,94)=48.15，p<.01)。それらの影響力の違いを調べるため、重回帰分析を行った（表14)。

表14　アルバイト・サークル満足感と充実感が多次元自我同一性に与える影響

	標準偏回帰係数β	単相関
充実感	.82**	.84**
アルバイト満足感	0.02	.23**
サークル満足感	0.03	.26**

** 1%水準で有意

N=107, F(5,94)=48.15,p<.01, R=.84, R2乗=.70, 調整済みR2乗=.69

上記の結果と同様に、充実感のみが多次元自我同一性に有意に影響を与えていることがわかった（標準偏回帰係数β=.82，p<.01)。アルバイトとサークルに対する満足感では特に有意な差は見られなかった。これより、多次元自我同一性の形成を促進するためには充実感を高めることが重要だということが再確認された。

８．満足感と充実感がアイデンティティ確立に与える影響

一元配置分散分析とｔ検定の結果、学業とアルバイトに対する満足感と充実感が高い学生がアイデンティティ確立も高いということがわかった。これらの満足感と充実感によってアイデンティティ確立への影響力に差がでるかを調べた。その際、アルバイトとサークルに対する満足感は、すべての学生がそれらの活動に参加しているわけではないため、まずそれらを除外して分析を行った。その結果、満足感の違いによって影響力に差があることがわかった（F(3,357)=137.63，p<.01)。アイデンティティ確立に対する影響力を比較するため、重回帰分析を行った（表15)。

表15　学業・友人関係満足感と充実感がアイデンティティ確立に与える影響

	標準偏回帰係数 β	単相関
充実感	.74**	.72**
学業満足感	0.07	.27**
友人関係満足感	0.12	.10*

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意
N=355, F(3,357)=137.63,p<.01, R=.74, R2乗=.54, 調整済みR2乗=.54

その結果、充実感のみがアイデンティティ確立に有意に影響を与えていたことがわかる（標準偏回帰係数 β=.74，p<.01)。これより、充実感を高めることが自我同一性の確立につながるといえるだろう。

次に、アルバイトとサークルに対する満足感を含めて、アイデンティティ確立に対する影響力の違いを調べた。その結果、４つ満足感と充実感の多次元自我同一性への影響力に差があることがわかった（F(5,94)=48.15，p<.01)。それらの影響力の違いを調べるため、重回帰分析を行った（表16)。

表16　アルバイト・サークル満足感と充実感がアイデンティティ確立に与える影響

	標準偏回帰係数 β	単相関
充実感	.74**	.73**
アルバイト満足感	0.01	.17*
サークル満足感	0.02	.18*

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意
N=109, F(5,94)=48.15,p<.01, R=.73, R2乗=.54, 調整済みR2乗=.53

上記の結果と同様に、充実感のみが多次元自我同一性に有意に影響を与えていることがわかった（標準偏回帰係数 β=.74，p<.01)。アルバイトとサークルに対する満足感では特に有意な差は見られなかった。これより、自我同一性の確立のためには充実感を高めることが重要だということが再確認された。

９．学生生活に対する満足感と充実感の関連

自我同一性の形成・獲得に影響している要因を調べる分析を行った結果、充実感のみ

が非常に大きな影響を与えていることがわかった。その結果より、充実感は満足感とは違った、包括的な概念であり、充実感は満足感に規定されている可能性が考えられる。そこで、学業満足感、アルバイト満足感、サークル満足感、友人関係満足感により、充実感の平均点に差が出るかを分析した。その結果、それらすべての満足感が充実感に関連していることがわかった。

⑴　学業満足感と充実感の関連

学業満足感は、「大変満足している」・「満足している」を選んだ学生を満足群（125名)、「どちらでもない」を選んだ学生を中間群（137名)、「不満である」・「大変不満である」を選んだ学生を不満群（107名）とした。充実感の平均点を３群で比べると、満足群2.80、中間群2.57、不満群2.48であり、この充実感の平均点を一元配置分散分析により比較した。その結果、有意な差があることがわかった（$F(2,366)=15.87$，$MSE=3.28$，$p<.01$)。そのため、どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を見た（表17)。

表17　学業満足感の違いによる充実感の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	107	2.48	0.05	
中間群	137	2.57	0.04	満足群＞中間群・不満群**
満足群	125	2.80**	0.04	

** 1%水準で有意

満足群と中間群、満足群と不満群には１％水準で有意な差が見られ、中間群と不満群には差が見られなかった。つまり、学業に対する満足感が高い学生のほうが充実感を感じているということを表している。

⑵　アルバイト満足感と充実感の関連

アルバイト満足感も上記と同様に、学生を満足群（150名)、中間群（60名)、不満群（54名）に分けた。充実感の平均点を３群で比べると、満足群2.72、中間群2.64、不満群2.48であり、それらを一元配置分散分析によって比較した。その結果、これらの３群の間に有意な差があることがわかった（$F(2,261)=5.38$，$MSE=1.06$，$p<.05$)。差のある群間を調べるため、多重比較を調べた（表18)。

表18　アルバイト満足感の違いによる充実感の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	54	2.48	0.46	
中間群	60	2.64	0.41	満足群＞不満群**
満足群	150	2.72	0.45	

** 1%で有意

満足群と不満群には１％水準で有意な差が見られたが、満足群と中間群、中間群と不満群には差は見られなかった。この結果は、アルバイト満足感が高い学生は低い学生よりも充実感を感じていることを表しており、アルバイトへの満足感も学生が充実感を感じるために大切であることがわかる。

⑶　サークル満足感と充実感の関連

サークル満足感も上記と同様に、学生を満足群（93名）、中間群（36名）、不満群（15名）に分けた。充実感の平均点を３群で比べると、満足群2.73、中間群2.54、不満群2.46であり、それらを一元配置分散分析によって比較した。その結果、この３群の間に有意な差があることがわかった（F(2,141)=3.74，MSE=.82，p<.05）。どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表19）。

表19　サークル満足感の違いによる充実感の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	15	2.46	0.56	
中間群	36	2.54	0.40	満足群＞中間群・不満群*
満足群	93	2.73	0.48	

*　有意傾向(p=.09)

満足群と中間群、満足群と不満群にそれぞれ有意な傾向は見られたが、有意な差といえるものではなかった。中間群と不満群にも差は見られなかった。これは、サークル活動満足感が高い学生のほうがそうでない学生よりも充実感を感じている傾向にあることを表しており、サークル活動に満足感を感じることも、充実感を高める要因である可能性が示唆された。

⑷　友人関係満足感と充実感の関連

友人関係満足感においても上記と同様に、学生を満足群（302名）、中間群（43名）、不満群（17名）に分けた。充実感の平均点を３群で比べると、満足群2.66、中間群2.40、不満群2.42であり、それらを一元配置分散分析によって比較した。その結果、３群の間に有意な差があることがわかった（F(2,359)=7.93，MSE=1.69，p<.01）。どの群間に差があるのかを調べるため、多重比較を行った（表20）。

表20　友人関係満足感の違いによる充実感の比較

	N	平均点	SD	多重比較
不満群	17	2.42	0.65	
中間群	43	2.40	0.35	満足群＞中間群**
満足群	302	2.66	0.46	

**　1%水準で有意

満足群と中間群に１％水準で有意な差があったが、満足群と不満群や中間群と不満群

には差が見られなかった。これは、友人関係満足感が高い学生のほうが充実感を感じているということ表している。そして、友人関係に不満と考えている学生よりも、満足とも不満とも明確な答えを出せていない学生のほうが充実感が低いこともわかる。

10．充実感に影響を与える学生生活に対する満足感

一元配置分散分析の結果、学業満足感やアルバイト満足感、サークル満足感、友人関係満足感において、満足感が高い学生は、充実感が有意に高くなるということがわかった。これらの満足感によって充実感への影響力に差があるかを調べた。その結果、３つの満足感より充実感への影響力に差があることがわかった（$F(4,97)=8.59$, $p<.01$）。それらの影響力の違いを調べるため、重回帰分析を行った（表21）。

表21　学生生活満足感が充実感に与える影響

	標準偏回帰係数β	単相関
学業満足感	.31**	.39**
アルバイト満足感	0.04	.20*
サークル満足感	0.10	.28**
友人関係満足感	.28**	.38**

** 1%水準で有意
* 5%水準で有意
N=102, F(4,97)=8.59,p<.01, R=.51, R2乗=.26, 調整済みR2乗=.23

その結果、学業満足感（標準偏回帰係数$\beta=.31$, $p<.01$）と友人満足感（標準偏回帰係数$\beta=.28$, $p<.01$）が強く充実感に影響を与えているということがわかった。これより、充実感は満足感とは違うものであり、学業と友人関係に対する満足感を高めることが充実感につながると考えられる。

Ⅳ．考察

１．仮説の検討

⑴　仮説１、仮説２の検討

仮説１、仮説２において、学生生活満足感・充実感が自我同一性の形成と確立に影響を及ぼすであろうと想定した。分析の際は、自我同一性の形成と確立を分けていたが、結果において重複する部分が多々あったため、併行して考察していくこととする。

仮説１、仮説２を明らかにするため、自我同一性の形成・確立と満足感・充実感の関連を調べた。その結果、自我同一性の形成には、学業や友人関係、アルバイトに対する満足感と充実感が関連し、自我同一性の確立には、学業とアルバイトに対する満足感と充実感が関連していることがわかった。また、これらの満足感や充実感が高い学生は、低い学生に比べてより自我同一性の形成と確立の感覚を持っているという関連が見出さ

れた。次に、自我同一性の形成・確立に対して影響を与えている要因を調べた結果、充実感のみが自我同一性の形成と確立に影響を与えていることが明らかになった。この結果は、充実感気分が自我同一性統合の方向と対応し、退屈空虚感が自我同一性の拡散の方向と対応するという西平（1979）や大野（1984）の研究結果を支持するものであった。しかし、各満足感が自我同一性の形成・確立に影響は与えていなかったという結果は、青年期に当たる学生の満足感と自我同一性は関連しているという笠井（2004）の研究結果とは異なるものであった。この問題を考える際、國眼（2005）らの研究が、学業満足感が学生生活の充実感に大いに関連しているという結果を示していることから、充実感は満足感により形成される概念であると考えられる。つまり、学生の満足感は自我同一性の形成・確立に間接的に影響していると示唆されるのである。

これより、自我同一性の形成・確立に充実感が影響を与えていたことから、仮説１、仮説２は支持されたといえる。したがって、自我同一性の形成・確立の前提として学生は、日々の生活に満足感・充実感を持つことが重要であるということである。ただし、満足感と充実感の違いについてはさらに検討する必要があると思われる。

⑵　満足感と充実感の違いの検討

國眼（2005）の研究から、充実感は満足感により形成されると考えられた。満足感と充実感の関連を調べた結果、これらの満足感が高い学生のほうがより高い充実感を持っているということが明らかになった。そして、充実感に影響を与える満足感について更に調べた結果、学業と友人関係に対しての満足感を高めることが、充実感を高めることに繋がるということがわかった。國眼（2005）らは、学業に対する満足感が学生生活の充実感に大いに関連しているという結果を示すと同時に、学生が大学生活で最も大切にしていることが、勉学と豊かな人間関係であったことも示していた。また、現代の学生は以前に比べて学業や勉学を重視していることを明らかにされている（武内ら，2004）。友人関係に対する満足感が充実感の形成に影響を与えるという結果に対しては、青年期において友人への否定感や不安定感が、生活の否定的な不安定さに繋がること（榎本ら，1999）や、学生が密な人間関係を持てているかどうかが充実感に影響を与えているということ（谷田，2006）が明らかにされている。

学生の充実感は、学業と友人関係に対する満足感により規定されるという結果は、これらの先行研究を支持するものであった。つまり、充実感は部分的な満足感を包括する総合的な概念であると考えられるだろう。これより、学生にとってまず大切なことは、学業と友人関係に満足感を得ることだろうと考えられる。

2．自我同一性の形成・確立に充実感が影響していたことについて

自我同一性という青年期を生きる学生に共通する発達課題に対し、どういった学生が発達課題を乗り越えやすい、というようなことを一般化することは難しい。そこには、個人差などの存在もあるが、一様に「自分とは何か」という壁にぶつかり悩んだ末に答えを導き出すものであると考えるからだ。つまり、自我同一性の形成や確立という誰もが避けては通れないことに対して大切なことは、その学生がどういった背景を持つ学生であるかということよりも、どのようにその課題に向き合っているかが重要であるからだ。特に、自我同一性という主観的感覚に影響を与えるものは、同様に主観的感覚のものだと考えられる。本研究で得られた、自我同一性の形成・確立に影響を与えていた要因が、充実感だったという結果からも同様のことが伺える。しかし、同じ主観的感覚であるはずの学業や友人関係、アルバイト、サークルに対する満足感が影響を与えていなかったという結果は興味深く、特に友人関係への満足感が影響していなかったことは、今後の青年期の自我同一性研究に新たな指針を示すことになるだろう。なぜならこれまでに行われた多くの研究が、自我同一性の問題には友人関係を含めた対人関係が非常に重要であるとしているからである。ここから考えられることは、自我同一性の統合に重要なことは、学業や友人関係といった部分的な満足感ではなく、それらを包括した生活全体に対する満足感であると考えられる。その生活全体に対する満足感が、本研究では充実感という概念に当てはまったのだろう。とはいえ、これらの側面的な部分がなければ生活全体に対する評価が構成されることはなく、一つ一つの側面も当然重要であると考えられる。特に、学生が重要とする活動への満足感は、「総合的満足感」にとって大きな意味を持つだろう。今後学生生活を対象とした研究は、この個人が重要とする活動という要因を含めて進めていく必要があるだろう。

3．総合考察

本研究で得られた結果から、学業満足感と友人関係満足感により形成された充実感が、自我同一性の形成・確立に影響を与えるということがわかった。これを、「学生の自我同一性統合モデル」と呼ぶ（図７）。

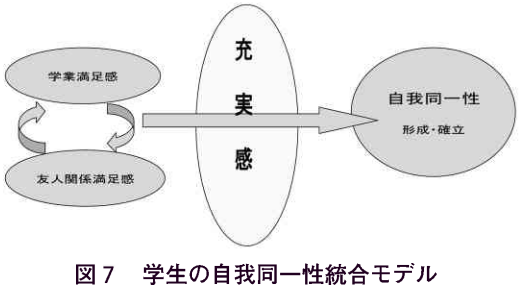

図７　学生の自我同一性統合モデル

上述の「学生の自我同一性統合モデル」より、学生生活にとってまず大切なことは、学業に精一杯取り組み、友人との良好な関係を築くことだと考えられる。それら２点に対して満足感を持つことが、青年期を生きる学生にとって自我同一性を形成・確立していくためのスタート地点になるだろう。学業と友人関係というものは、青年期を生きる学生にとって毎日携わるものであると同時に、非常に重要な意味を持つことが明らかになった。大学で講義を受ける日々は、その時間を生きている学生にとっては、一見同じことの繰り返しに感じるかもしれないし、講義に出ること自体が面倒になることもあるかもしれない。これは、友人関係においても同様のことがいえる。しかし、学業で優秀な成績を修めることや、良好な友人関係を築くことだけをいっているのではない。学生一人ひとりが異なった人間であるし、当然そこには個人差もある。日々の生活に前向きになれる時もあれば、無気力になる時もあるだろう。学生生活という日々を、ただ漫然とやり過ごすように生きるのではなく、一日一日を精一杯、主体的に生きようとする姿勢を持ち続けることこそが、現在の学生に求められていると思う。その姿勢を根底に持ち続けることが、学業や友人関係に対して満足感を持つことに繋がり、そこから充実感が生まれ、最終的に自我同一性が形成され確立される方向に進んでいくのではないだろうか。この研究を始める際、今後の学生に対し、学生生活の送り方の指針を示せたらと考えていたが、今回、研究を終えてみて、学生がどのように学生生活を送ればよいかという方向性を得られたことを嬉しく思う。

今回の研究から得られたこのモデルは改善の余地が多々ある。満足感と充実感が自我同一性の形成・確立を規定する要因という考えの上に成り立っているが、西平（1979）や大野（1984，2004）の研究では、充実感を規定する要因として自我同一性を挙げている。充実感と自我同一性の位置関係を明らかにすることは、今後の大きな課題だと考えられる。また、自我同一性の形成と確立に対しそれぞれ尺度を用いて測定したが、「形成」と「確立」どちらも非常に似た概念であったため、それらを分けて考えるべきなのか否か迷うところもあった。今後はこれら２つの概念の関係性についても言及していく必要があるだろう。さらに、本研究では、尺度の全体得点を扱い、構成因子については触れてこなかった。尺度の全体得点を扱うことで大まかな枠組みが明らかになったことから、構成因子について触れていけばさらに深まった研究結果に繋がると考えられる。アルバイトやサークル活動への参加者と非参加者の人数の違いを調整すれば、これらの要因についてもさらに言及することができるだろう。最後に、このモデル構築に学生が重要とする活動への満足感といった要素が抜けてしまったことは非常に残念であった。今後、その点の改善は必要である。

本研究で得られた結果は、学生にとって学生生活の送り方のひとつの可能性を示すものとなるだろう。青年期を生きる学生にとって自我同一性の形成・確立というのは非常

に重要な発達課題である。Erikson（1980）は研究の中で、青年期は自我同一性形成のために様々な経験をすることができる時期であり、そのことを社会から認められた期間としてモラトリアム（猶予）と定義している。しかし、現代ではモラトリアムの延期や、青年期の長期化といったことがニート問題などに形を変えて見え隠れしている。つまり、学生生活を通じて自我同一性を形成・確立していくことが、これから社会に飛び立つ学生にとって非常に重要なことであると考えられる。本研究で提唱した、「学生の自我同一性統合モデル」はまだ完成したとはいえない。しかし、筆者らの経験と照らし合わせてみると、このモデルには内的な整合性はあると思われる。これから学生生活を送る学生たちにひとつの指針として提示したいと同時に、このモデルの妥当性の検討やさらに内容の拡充されたモデルへの発展などを今後の研究に期待したい。

Ⅴ．文献

青柳　肇・井原由貴　2000　課題の目標設定に及ぼす内的基準と外的基準の効果　早稲田大学人間科学研究, 13, 39－49.

新井洋輔・松井　豊　2003　大学生の部活・サークル集団に関する研究動向　筑波大学心理学研究, 26, 95－105.

金子俊子　1995　青年期における他者との関係性と自我同一性　発達心理学研究, 16, 41－47.

笠井孝久　2004　青年期の自己不満足感Ⅱ　千葉大学教育学部研究紀要, 52, 121－125.

川瀬正裕・松本真理子（編著）2002　新・自分探しの心理学―自己理解ワークブック―　ナカニシヤ出版

小平英志・西田裕紀子　2004　大学生のアルバイト経験とその意味づけ　日本青年心理学会大会発表論文集, 12, 30－31.

國眼眞理子・松下美知子・苗田敏美　2005　文系学部生の大学生活満足度・充実度と職業イメージとの関連―キャリア支援のための予備的検討―　金沢大学大学教育開放センター紀要, 25, 69－84.

E. H. エリクソン　岩瀬庸理（訳）1973　アイデンティティ：青年期と危機　金沢文庫
（Erikson, E. H. 1968　*Identity : youth and crisis*. 1st ed. W. W. Norton.）

E. H. エリクソン・J. M. エリクソン　村瀬孝雄・近藤邦夫（訳）2001　ライフサイクル、その完結　みすず書房
（Erikson, E. H. & Erikson, J. M. 1997　*The life cycle completed*. W. W. Norton.）

E. H. エリクソン　小此木啓吾（訳）1982　自我同一性：アイデンティティとライフ・サイクル　誠信書房
（Erikson, E. H. 1980　*Identity and the life cycle*. W. W. Norton.）

榎本淳子　1999　青年における友人への感情と生活充実感　日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 588.

福田哲也・浦井孝夫・細見　修・松原広幸　2006　2005年度学生生活満足度調査報告　順天堂大学スポーツ健康科学研究, 10, 71－81.

古野景子・藤原珠江　2003　現代青年の友人関係とアイデンティティ確立との関連　長崎純心大学心理教育相談センター紀要, 2, 13－24.

池野光義・大坪輝海・富永知佐子　2002　大学生のスポーツ・運動行動とその意識に関する調

査　鎌倉女子大学紀要, 9, 99－107.
前川佳美　1982　青年の自我同一性確立の問題構造―孤独と連帯をめぐって―　東京女子大学社会学会紀要, 10, 97－103.
牧野幸志・森裕紀子　2002　大学生活への満足度に関する教育心理学的研究―学生は大学に満足しているか？―　高松大学紀要, 37, 59－72.
村澤和多里　2005　E. H. エリクソンとP. L. バーガーによるアイデンティティ論の検討―青年期の理解にと援助に向けて―　作新学院大学人間文化学部紀要, 3, 1－15.
森　海子・河村茂雄　2001　大学生における自我同一性地位と充実感に関する一研究　岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要, 11, 115－125.
西平直喜　1973　青年心理学　共立出版
大久保智生・青柳　肇　2000　心理的居場所に関する研究(2)―居場所感尺度作成の試み―　日本教育心理学会総会発表論文集, 47, 161.
大野　久　1984　現代青年の充実感に関する一研究―現代日本青年の心情モデルについての検討―　教育心理学研究, 32, 100－109.
大野　久・茂垣まどか・三好昭子・内島香絵　2004　MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討　教育心理学研究, 52, 320－330.
迫　俊道・荒井貞光　2002　大学生のクラブ・サークル活動に関する研究　広島体育学研究, 28, 11－20.
佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央　1996　青年期における自我同一性の感覚と役割受容および充実感との関連　愛媛大学教育学部紀要, 43, 81－91.
関　峋一・返田　健（編著）1983　大学生の心理　有斐閣
篠崎信之・小林正夫　2006　フォーカス・グループ・インタビューによる学生生活の質（Quality of Student Life : QoSL）の研究(2)―縦断的研究による検討―　東洋大学人間科学総合研究所紀要, 5, 130－143.
白石尚大・岡本祐子　2005　大学生の意欲低下傾向とアイデンティティ発達―家族機能の関連性―　青年心理学研究, 17, 1－13.
宗田直子・岡本裕子　2006　アイデンティティの発達をとらえる際の「個」と「関係性」の概念の検討―「個」尺度と「関係性」尺度作成の試み―　青年心理学研究, 17, 27－42.
高井範子　2006　青年期および成人期における充実感に関する検討　太成学院大学紀要, 8, 69－78.
武内　清・佐野秀行・伊藤素江・谷田川ルミ　2004　現代大学生の変化と大学満足度に関する実証的研究―「12大学・学生調査」の再分析―　上智大学教育学論集, 39, 27－43.
田中　正　1992　「自我の完成」への助成と短大教育―自我の変容過程に関する実証的研究を踏まえて―　名古屋文理短期大学紀要, 17, 27－31.
谷　冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究, 49, 265－273.
谷田　薫　2006　大学生の学生生活充実度に関する要因モデル作成のための基礎分析―関西学院大学　カレッジ・コミュニティ調査資料を用いて―　総研論集, 18, 1－16.
植村善太郎・小川一美・吉田俊和　2001　大学生の適応過程に関する縦断的研究(2)―大学生の学習への取り組み、および大学生活満足感に関連する要因の検討―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 29－43.
保井明子・高橋伸子・西塚道子・佐藤文子　1993　私立短期大学生の学生生活に対する意識と満足度―仙台白百合短期大学の場合―　仙台白百合短期大学紀要, 21, 87－102.
山田剛史　2004　現代大学生における自己形成とアイデンティティ―日常的活動とその文脈の観点から―　教育心理学研究, 52, 402－413.